

「聖書の預言におけるエルサレム」(6/23/96 Tape#0674)

カルバリー・チャペル コスタメサの夕拝

デービッド・ホッキング

エルサレム・ポストの現在の話題は、シリア、エジプト、サウジ・アラビアの指導者が新政権に対し、エルサレムはパレスチナ国家の首都にならなければならないと警告したことです。もしゴラン高原をシリアに与えないのであれば、それを宣戦布告と考えると、イスラエルに対し警告しました。少なくとも、事態が緊張を帯びつつあると言えるでしょう。疑問は、現政権の誰もがまだ口を開いていないということで、なぜ世界が最近のイスラエルの政権交代にこんなにも気分を害しているか、ということです。その答えは、神のみことばに従うことを決めた政権が、イスラエルに発足したからです。世界はそのことを知っていて、それを阻止しようとしているのです。この政権は、私たちの祈りをとても必要としていると思います。しかし、不安に思う必要はありません。神は、脅威があるからといって、ご自身の計画を変えたりはなさらないからです。エルサレムについては、すべて神がこうなるとおっしゃった通りになることに、変わりはありません。何も変わることはありません。さて、聖書の預言におけるエルサレムに関して、詩篇122篇にこう書かれています。「人々が私に、『さあ、主の家に行こう。』と言ったとき、私は喜んだ。エルサレムよ。私たちの足は、おまえの門のうちに立っている。エルサレム、それは、よくまとめられた町として建てられている。そこに、多くの部族、主の部族が、上って来る。イスラエルのあかしとして、主の御名に感謝するために。そこには、さばきの座、ダビデの王座があったからだ。エルサレムの平和のために祈れ。『おまえを愛する人々が栄えるように。おまえの城壁のうちには、平和があるように。おまえに宮殿のうちには、繁栄があるように。』私の兄弟、私の友人たちのために、さあ、私は言おう。『おまえにうちに平和があるように。』私の神、主の家のために、私は、おまえの繁栄を求めよう。」いっしょにお祈りしましょう。「お父様、あなたのみことばに感謝します。あなたの約束されたこと、予言されたことのすべてが、実現することゆえに感謝します。人の様々な政治的策略や軍事力によって、あなたが人類の歴史に計画されたことと、その偉大なクライマックスが少しでも変わることはありません。私たちは、あなたのみことばによると、エルサレムが預言の計画の中心になっていることを知っています。私たちは神のみことばにおいてエルサレムが傑出していることを調べていきますが、その際に理解する心を与えてくださるようお願いいたします。主よ、感謝して、イエス様の御名によってお祈りします。アーメン。」

エルサレムという名前は、聖書に811回出てきます。そのうち、141回は新約聖書に出てきます。聖書外典を信じている宗教の背景を持っている人に対して言わせていただきたいのですが、面白いことに、聖書外典全体を通して、エルサレムの名前はたった1回しか出てこないのです。プロテスタントの英語の新・旧約聖書に出てくる頻度の観点から見て、聖書外典にエルサレムがないことは、かなり奇妙です。けれども、エルサレムの完全な名前は、トーラーと呼ばれる聖書の最初の五つの書物、つまりモーセ五書にも出てきません。短縮形では現われます。新約聖書では、福音書と使徒行伝だけで、141回のうち127回が出てきます。パウロの手紙には10回しか現われ

ず、他のすべての書物にはたった1回しか現われません。シャレムというエルサレムの短縮形の言葉は、創世記14章18節で初めてエルサレムの名前が使用されているのを含めて、4回出てきます。エルサレムのことを言及している「聖なる都」は、約27回出てきます。「シオン」という言葉もエルサレムのことを言っていますが、私の言うことを信じていただけるなら、聖書に152回出てきます。そのうち29回は、詩篇にあります。17回出てくるエルサレムと合わせると、詩篇だけで合計46回になります。エルサレムが尊ばれ、神の預言の計画として語られています。紀元一世紀のギリシャの地理学者であるストレイブルは、エルサレムをねたんではならない、誰も争ってはならないものとして述べました。彼は預言者でもないし、預言者の子でもないことは明かですが、中東における現在の論争は、エルサレムに関するもので、エルサレムが誰に属するのかというものであり、聖書とイスラエルに反対して来た人が持ち出してきている論点の多くが、その議論に見られます。

エルサレムにまつわる考古学的な証拠を、私が理解している限り出してみたいと思います。この名前は、紀元前19世紀のエジプトのエクスクレイションの出典(Excratation text)で現われます。アルーシャリムーム(alu-ru-sa-lim)と呼ばれています。エブラ(Ebra)古文書または、エブラ書字板にも出てきます。これは、だいたい紀元前2500年のものです。これは重要だと感じる人がいる理由は、この年代がアブラハムがこの土地に来る前だからです。古代において、その名前は、「土台と平和」という意味だったと考えられています。一部の人たちが、特に現代において主張していることは、この名前がカナンの中の神のことを言及しているというものです。私は、これについて言い争うつもりはありません。ただ言及するにとどめます。その人たちは、それは、カナンの神、シャレムだと言います。この町は、実際は「シェレムの土台」という意味だと言います。エルサレムを言及しているものは、紀元前14世紀のアマルナ文書にも見つかります。当時は、アブド・キバ(Adbu-Heba)という名の王によって支配されていました。このことも、和平プロセスに携わっている人たちにとって重要になっています。アブラハムの時代に、創世記から、いと高き神の祭司でもあったメルキゼデク王がいたことがわかっています。ユダヤ人が、ヨシヤの指揮の下でカナンの地に入ったとき、エルサレムはエブス人と呼ばれた部族によって支配されていました。その王の名前は、アドニ・ベゼクでした(士師1:5 等)。ダビデ王が、エブス人を征服した人でした。実際、今年には、エルサレムのユダヤ人支配3000年周年です。シオンという名前が、ダビデ王のときにこの町に付けられました。これが、「乾いたところ」を意味するヘブル語に関連すると言う人もいます。あまり感激するものではありませんが、このようなことを言おうとしていたことをお話したかったのです。私たちが知っている通り、ダビデ王は、アラウナというエブス人から石打ち場を購入しました(2サム 24:18)。これが、後にソロモンの神殿の場所になりました。岩のドームは、全く同じ場所にあると言う人もいます。詩篇の多くは、この町だけでなく神殿に対してもシオンという言葉を用いています。イスラエルを支持し、この国の神の預言の計画を信じている人たちは、よくシオニストと言われています。イザヤ書1章27節では、エルサレムは、興味深いことに、国民全体に言及しています。これは、単なる古代のエブス人の町よりも、もっと意義のあるものになっています。そのエブス人の町は、オフエルの丘(2 歴代 27:3 等)にありましたが、私にはこれがそれほど劇的なものだ

思えません。オフエルは、南の壁、エルサレムの現在の壁の南側にあります。これは発掘されて、ここがダビデの町だと述べられています。それは、今日みなさんの見るすべての場所ではありません。聖書の中で、エルサレムを指すときの最もありふれた使い方は、メシヤ時代の神の都です。実は、これは、新約聖書の「天のエルサレム」と同意語だと私は思います。問題は、エルサレムに関する聖書の事実は何であるかということです。もしメモをお取りになりたいのであれば、書き留めておきたければ、それがどれだけあるか教えたいと思います。かなりあります。5000あります。そんなにたくさんではありませんが、メッセージが終わるまでには、そのくらいあるように思えるかもしれません。

創世記14章を開いてください。創世記14章です。18節をご覧ください。聖書の預言におけるエルサレムに関して、聖書の中でまず第一に気づくことは、エルサレムは、アブラハムが祝福を受けた場所であるということです。従って、すべてのユダヤ人の心にとって、また全世界にいる私たちの心の中で、エルサレムが卓越したものになることを望みます。ここは、アブラハムが祝福を受けた場所です。アブラハムは、すべての者の父です(ローマ4:16)。18節にはこうあります。「またシヤレムの」これが、エルサレムの短縮形ですが、「王メルキゼデクはパンとぶどう酒を持って来た。彼はいと高き方の祭司であった。彼はアブラムを祝福して言った。『祝福を受けよ。アブラム。天と地を造られた方、いと高き神より。あなたの手に、あなたの敵を渡されたいと高き神に、誉れあれ。』アブラムはすべての物の十分の一を彼に与えた。」シヤレムの意味は「平和」です。聖書を取って、詩篇76篇を開いてください。詩篇76篇です。シヤレムは平和を意味します。平和の町は、とかく戦争の町でした。不一致、争い、悪のある町です。姦淫の町です。けれども、それは平和を意味します。詩篇76篇1節と2節を読みます。「神はユダにおいて知られ、御名はイスラエルにおいて大きい。神の仮庵はシヤレム」つまりエルサレム「にあり、その住まいはシオンにある。」詩篇128篇5節によると、私たちは、アブラハムと同じく祝福を受けます。詩篇128篇5節です。「主はシオンからあなたを祝福される。あなたはいのち日の限り、エルサレムの繁栄を見よ。」ですから、この記者は、冒頭でエルサレムがアブラハムが祝福を受けた場所であると言っています。

2番目ですが、ヨシュア記15章をお開きください。聖書の預言におけるエルサレムに関して気づくことは、ここが、ダビデ王がエブス人から攻め取った場所であることです。ここは、ダビデ王がエブス人から攻め取った場所です。ヨシュア記15章62節です。単純な記述があります。ヨシュア記15章62節です。いや、63節です。「ユダ族は、エルサレムの住民エブス人を追い払うことができなかった。それで、エブス人はユダ族とともにエルサレムに住んでいた。今日もそうである。」それでは、サムエル記第25章を開いてください。サムエル記第25章です。聖書によると、カナン人の部族のすべてをイスラエルの民が追い払うことになっていましたが、エブス人はエルサレムにとりでを築いたので、彼らは追い払うことができませんでした。神が仰せられたのにもかかわらず、ただエブス人ともに住むようになりました。サムエル記第25章4節から始まります。読んでみましょう。「ダビデは30歳で王となり、40年間、王であった。ヘブロンで7年6ヶ月、ユダを治め、エルサレムで33年、全イスラエルとユダを治めた。王とその部下がエルサレムに来て、その地の住民エブス人のところに行ったとき、彼らはダビデに言った。『あなたは、ここに来ることはできない。め

しいや足なえでさえ、あなたを追い出せる。』彼らは、ダビデがここに来ることができないと、考えていたからである。しかし、ダビデはシオンの要害を攻め取った。これが、ダビデの町である。その日ダビデは、『だれでもエブス人を打とうとする者は、地下道を抜けて、ダビデが憎む足なえとめしいを打て。』と言った。このため、『めしいや足なえは宮にはいってはならない。』と言われている。こうしてダビデはこの要害を住まいとして、これをダビデの町と呼んだ。ダビデはミロあるいはマイロ、「から内側にかけて、回りに城壁を建てた。ダビデはますます大いなる者となり、万軍の神、主が彼とともにおられた。」そして、12節。「ダビデは、主が彼をイスラエルの王として堅く立て、ご自分の民イスラエルのために、彼の王国を盛んにされたのを知った。」ダビデは、3000年前にエブス人の要害を攻め取りました。

さて、サムエル記第二7章をお開きください。サムエル記第二7章です。エルサレムは、アブラハムが祝福を受けた場所であり、ダビデ王がエブス人から攻め取った場所であることを学びましたが、それだけでなく、ここは、神殿が建てられた場所でもあります。このために、エルサレムが現在のようになり、現在エルサレムがこんなにも争点になっているかがわかります。まるで全世界が、聖書にすでに知らされていることを、すなわち神の宮がエルサレムに属していることを、恐れているかのようです。私たちが先に読んだとおり、神は、ここにご自分の御名を住ませることを言われました。ここが、聖所の場所になるのです。サムエル記第二7章1節です。「王が自分の家に住み、主が周囲の敵から守って、彼に安息を与えられたとき、王は預言者ナタンに言った。『ご覧ください。この私が杉材の家に住んでいるのに、神の箱は天幕の中にとどまっています。』すると、ナタンは王に言った。『さあ、あなたの心にあることをみな行ないなさい。主があなたとともにおられるのですから。』その夜のことである。次のような主のことばがナタンにあった。『行って、私のしもべダビデに言え。主はこう仰せられる。あなたはわたしのために、わたしの住む家を建てようとしているのか。わたしは、エジプトからイスラエル人を導き上った日以来、今日まで、家に住んだことがなく、天幕、すなわち幕屋にいて、歩んできた。わたしがイスラエル人のすべてと歩んできたどんな所でも、わたしが、民イスラエルを牧せよと命じたイスラエル部族の一つにでも、『なぜ、あなたがたはわたしのために杉材の家を建てなかったのか。』と、一度でも、言ったことがあろうか。今、わたしのしもべダビデにこう言え。万軍の主はこう仰せられる。わたしはあなたを、羊を群れを追う牧場からとり、わたしの民イスラエルの君主とした。そして、あなたがどこに行っても、あなたとともにおり、あなたの前であなたのすべての敵を断ち滅ぼした。わたしは地上の大いなる者の名に等しい大いなる名をあなたに与える。』さらに、「『わたしが、わたしの民イスラエルのために一つの場所を定め、民を住みつかせ、民がその所に住むなら、もはや民は恐れおののくことはない。不正な者たちも、初めのころのように重ねて民を苦しめることはない。それは、わたしが、わたしの民イスラエルの上にさばきつかさを任命したころのことである。わたしはあなたをすべての敵から守って、安息を与える。さらに主はあなたに告げる。『主はあなたのために一つの家を造る。』あなたの日数は満ち、あなたがあなたの先祖たちとともに眠るとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子を、あなたのあとに起こし、彼の王国を確立させる。彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしはその王国の王座を」何と書いてありますか。(会衆から)「とこしえまで」もう一度言っ

てください。(会衆から)「とこしえまで」「堅く立てる。」中東の和平問題を議論している人たちは、神の仰せられたことをどうやら忘れてしまったようです。「とこしえまで」と神は言われます。20節には、「主は、お告げになった約束を果たされた」とあります(訳者注:1列王 8:20 のこと)。

詩篇125篇をお開きください。詩篇125篇です。エルサレムは、神殿が建てられた場所です。神は、この場所をとこしえに得ることを望まれました。詩篇125篇1節と2節です。すばらしいことばです。「主に信頼する人々はシオンの山のような。ゆるぐことなく、」どのくらいですか。(会衆から)「とこしえに」もう一度言ってください。(会衆から)「とこしえに」「ながらえる。山々がエルサレムを取り囲むように、主は御民を今より」次の言葉は何ですか。(会衆から)「とこしえまでも」もう一度言ってください。(会衆から)「とこしえまでも」「囲まれる。」みなさん、この言葉を決して忘れないでください。神はエルサレムを、神の家のための、神の聖所のための、ご自身のとこしえからとこしえまでの場所としてお建てになりました。「山々がエルサレムを取り囲むように、」実際にそのように取り囲んでいます。「主は御民を囲まれる。」これは、「ハレルヤ」とか「主を賛美せよ」とかいうのに値すると思います。みなさん興奮していらっしゃっても、そのことを心配しないでください。

4番目です。4番目です。ミカ書3章を開いてください。ミカ書3章です。エルサレムは、すべての者の父であるアブラハムが祝福を受けた場所であることを話しました。主ご自身が行なわれたことは重要です。エルサレムは、ダビデ王がエブス人を征服した場所です。エルサレムは、主の神殿が建てられた場所です。4番目は、エルサレムはバビロンによって滅ぼされた場所です。イラクのサダム・フセインを初めとして他の中東の指導者までが、この出来事を非常に喜んで話しているのには驚きます。エルサレムはバビロンによって滅ぼされました。湾岸戦争のときサダム・フセインは、ネブカデネザルに倣って、イスラエルに同じことをしたい、と言いました。しかし、神は他のことを考えておられました。ミカ書3章8節はとても興味深いです。「しかし、私は、力と、主の霊と、公義と、勇気とに満ち、ヤコブにはそのそむきの罪を、イスラエルにはその罪を告げよう。これを聞け。ヤコブのかしらたち、イスラエルの家の首領たち。あなたがたは公義を忌みきらい、あらゆる正しいことを曲げている。血を流してシオンを建て、不正を行なってエルサレムを建てている。そのかしらたちはわいろを取ってさばき、その祭司たちは代金を取って教え、その預言者たちは金を取って占いをする。しかもなお、彼らは主に寄りかかって、『主は私たちの中におられるではないか。わがわいは私たちの上にかかって来ない。』と言う。それゆえ、シオンは、あなたがたのために、畑のように耕され、エルサレムは廃墟となり、この宮の山は森の丘となる。」みなさん、この預言は、神によって細部に渡るまで成就されました。エルサレムは、石が積まれた廃墟の場所になりました。滅ぼされ、征服されました。

エレミヤ書7章を開いてください。バビロンによる全滅について面白いことの一つは、これが、将来の預言についての議論のための、歴史的な参照事項になっていることです。実際に、このヘブルの預言を読むと、神がこの出来事をこんなにも引用されているのかと、非常に驚きます。何回も、何回も、この民に起こったことを私たちの心に置かれました。この民は、神のひとみであり(申命32:10)、すべての国々の民のうちから選ばれました(申命7:6)。この民が、自分の欲することは何事でもできると定めて、神の契約を破って、背いたとき、この国に起こったことを、私たちの心に

置かれています。神がアメリカにどれだけ忍耐されるのだろうかと思いませんか。エレミヤ7章1節から読みます。「主からエレミヤにあったみことばは、こうである。『主の家の門に立ち、そこでこのことばを叫んで言え。主を礼拝するために、この門にいるすべてのユダヤの人々よ。主のことばを聞け。イスラエルの神、万軍の主は、こう仰せられる。あなたがたの行ないと、わざとを改めよ。そうすれば、わたしは、あなたがたをこの所に住ませよう。あなたがたは、「これは、主の宮、主の宮、主の宮だ。」と言っている偽りのことばを信賴してはならない。もし、ほんとうに、あなたがたが行ないとわざとを改め、あなたがたの間で公義を行ない、在留異国人、みなしご、やもめをしいたげず、罪のない者の血をこの所で流さず、』」現在中絶が実施されていることを考えさせられますが、『ほかの神々に従って自分の身にわざわいを招くようなことをしなければ、わたしはこの所、わたしがあなたがたの先祖に与えられたこの地に、とこしえからとこしえまで、あなたがたを住ませよう。なんと、あなたがたは、役にも立たない偽りのことばにたよっている。しかも、あなたがたは盗み、殺し、姦通し、偽って誓い、バアルのためにいけにえを焼き、あなたがたの知らなかったほかの神々に従っている。それなのに、あなたがたは、わたしの名がつけられているこの家のわたしの前にやって来て立ち、「私たちは救われている。」と言う。それは、このようなすべての忌みきらうべきことをするためか。わたしの名がつけられているこの家は、あなたがたの目には、強盗の巣と見えたのか。そうだ。わたしにも、そう見えていた。 — 主の御告げ — それなら、さあ、シロにあったわたしの住まい、先にわたしの名を住ませた所へ行って、わたしの民イスラエルの悪のために、そこでわたしがしたことを見よ。今、あなたがたは、これらの事をみな行なっている。 — 主の御告げ — わたしがあなたがたに絶えず、しきりに語りかけたのに、あなたがたは聞こうともせず、わたしが呼んだのに、答えもしなかった。それで、あなたがたの頼みとするこの家、わたしの名がつけられているこの家、また、わたしが、あなたがたと、あなたがたの先祖に与えたこの場所に、わたしはシロにしたのと同様なことを行なおう。わたしは、かつて、あなたがたのすべての兄弟、エフライムのすべての子孫を追い払ったように、あなたがたを、わたしの前から追い払おう。あなたは、この民のために祈ってはならない。彼らのために叫んだり、祈りをささげたりしてはならない。わたしにとりなしをしてはならない。わたしはあなたの願いを聞かないからだ。彼らがユダの町々や、エルサレムのちまたで何をしているのか、あなたは見ていないのか。・・・』と続きます。多くの人は、私たちクリスチャンは、この状況に対処するのを拒むべきである、と言います。興味深いことがあります。中東では、イスラエルに反対している人たちに関してですが、神がイスラエルの民をさばかれたので、彼らにはエルサレムを持つ権利はない、とよく主張します。こういう人たちは、本当は聖書のいう事に賛成していないのに、しばしばこの箇所を聖書から持ち出します。彼らは、私たちクリスチャンが真理を語ることを恐れている、と暗に主張しているかのようです。いや、私たちは恐れていません。それに、私は、神の恵みによって、このことをエルサレムのメッセージの中で伝えることに決めました。事実は次の通りです。神がご自身の家と御名をとこしえまでそこに住まわせるを言われたのですから、これが神の無条件の契約にもかかわらず、彼らの罪と偶像崇拜のために、神はイスラエルをさばき、エルサレムを滅ぼしました。これは、私たちみな忘れてはならないことです。

いっしょに詩篇137篇を開いてください。しかし、それは神がみことばを成就されない、という意味ではありません。神がイスラエルの民に与えられたエルサレムとイスラエルの地に関する契約が、無条件の契約であることに私は感謝しています。これは人間の行ないによるものではありません。神のご性質によるのです。私たちの救いの基もこれと全く同じであることを、私は本当に感謝しています。神があなたを救われたのは、あなたの行ないではなく、神の主権的で無条件の契約によってであることは、うれしいことではありませんか。今日の私の行ないでさえ、神の栄光と約束を打ち消してしまうように私は感じています。私たちは、神の主権に信頼することが本当に必要です。詩篇137篇には、次のようにあります。「バビロンの川のほとり、そこで、私はすわり、シオンを思い出して泣いた。その柳の木々に私たちは立琴を掛けた。それは、私たちを捕らえ移した者たちが、そこで、私たちに歌を求め、私たちを苦しめる者たちが、興を求めて、『シオンの歌を一つ歌え。』と言ったからだ。私たちがどうして異国の地にあつて主の歌を歌えようか。」次は、今日のイスラエルでも最も感動させる節の一つです。「エルサレムよ。もしも、私がおまえを忘れたら、私の右手がその巧みさを忘れるように。もしも、私が神を思い出さず、私がエルサレムを最上の喜びにもまさってたたえないなら、私の舌が上あごについてしまうように。主よ。エルサレムの日に、『破壊せよ、破壊せよ、その基までも。』と言ったエドムの子らを思い出してください。バビロンの娘よ。荒れ果てた者よ。おまえの私たちへの仕打ちを、おまえを仕返す日とは、なんと幸いなことよ。」おまえが私たちにした通りに。もし、わたしがエルサレムのことを忘れるようなことがあるのなら。もし、私がエルサレムを自分の最上の喜びにもまさるほど喜ばないなら。福音主義教会のクリスチャンが、神の約束の多くを、特に特定の場所や出来事を、教会がイスラエルになる点にまで、エルサレムが天国以外の他でもない点にまで象徴的に解釈することが多いのです。私は、天国が現実にあること、天のエルサレムがあることを主張します。けれども、私は、地のエルサレムもあり、これが再びメシヤ王国の中心になることを主張します。主イエスが、私たちの主イエス・キリストが、ダビデの子を御座で、エルサレムにおいて支配し、そこに再び神殿ができます。これは、イスラエルが計画した結果できるものではなく、メシヤが建てられた結果できるのです。6日で天地を創造できるお方が、一瞬にして宮を建てることに何ら支障はありません。けれども、「エルサレムよ。もしも、私がおまえを忘れたら、もしも、私がエルサレムを最上の喜びにもまさってたたえないなら、」という言葉が、まだ私たちの心に迫ってきます。

エズラ記1章をどうか開いてください。エルサレムは、アブラハムが祝福を受けた場所であることを話しました。ダビデ王が、エブス人から奪い取った場所です。神殿が建てられた場所です。バビロンによって、その町と宮が滅ぼされた場所です。エズラ1章に、聖書の預言のエルサレムについて、第五番目の事実があります。エルサレムは、ペルシャ人クロスが、主のために宮を建てることを望んだ場所です。イランの人の心に、そのような願いが与えられたことを考えてみてください。神の思いは、わたしたちの思いと異なり、神の道は、私たちの道とは異なります(イザヤ 56:8 参照)。エズラ1章1節から、次のようにあります。「ペルシャの王クロスの第1年に、エレミヤにより告げられた主のことばを実現するために、主はペルシャの王クロスの霊を奮い立たせたので、王は王国中におふれを出し、文書にして言った。『ペルシャの王クロスは言う。「天の神、主は、地のすべて

の王国を私に賜わった。この方はユダにあるエルサレムに、ご自分のために宮を建てられることを私にゆだねられた。あなた方、すべて主の民に属する者はだれでも、その神がその者とともにおられるように。その者はユダにあるエルサレムに上り、イスラエルの神、主の宮を建てるようにせよ。この方はエルサレムにおられる神である。』これを信じられますか。『「残る物はみな、その物を援助するようにせよ。どこに寄留しているにしても、その所から、その土地の人々が、エルサレムにある神の宮のために進んでささげるささげ物のほか、銀、金、財貨、家畜をもって援助せよ。」』そこで、ユダとベニヤミンの一族のかしらたち、祭司たち、レビ人たち、すなわち、神にその霊を奮い立たされた者はみな、エルサレムにある主の宮を建てるために上って行こうと立ち上がった。」今晚は、このすばらしい、すばらしい話を詳細にのべている時間がありません。エルサレムは、ペルシャ人クロスが、そうですイラン人が、イランの指導者が主に奮い立たせられて、イランの民のためではなく、主のために宮を建てた場所でした。

ネヘミヤ記1章を開いてください。エルサレムは、ネヘミヤの指導の下で、城壁が再建された場所です。このすばらしい話が、ここネヘミヤ1章にあります。「ハヌカの子ネヘミヤのことば。第二十年のキスレウの月に、私がシュシヤンの城にいたとき、」ところで、これは発掘されました。「私の親類のひとりハナニが、ユダから来た数人の者といっしょにやって来た。そこで私は、捕囚から残ったのがれたユダヤ人とエルサレムのことについて、彼らに尋ねた。」「もしも、私がエルサレムを忘れたら」というのを思い出してください。「すると、彼らは私に答えた。『あの州の捕囚からのがれて生き残った残りの者たちは、非常な困難の中にあり、またそしりを受けています。そのうえ、エルサレムの城壁はくずされ、その門は火で焼き払われたままです。』私はこのことばを聞いたとき、すわって泣き、数日の間、喪に服し、断食して天の神の前に祈って、言った。『ああ、天の神、主。大いなる、恐るべき神。主を愛し、主の命令を守る者に対しては、契約を守り、いつくしみを賜わる方。どうぞ、あなたの耳を傾け、あなたの目を開いて、このしもべの祈りを聞いてください。私は今、あなたのしもべイスラエル人のために、夜も昼も御前に祈り、私たちがあなたに対して犯した、イスラエル人の罪を告白しています。まことに、私も私の父の家も罪を犯しました。私たちは、あなたに対して非常に悪いことをして、あなたのしもべモーセのお命じになった命令も、おきても、定めも守りませんでした。しかしどうかあなたのしもべモーセにお命じになったことばを、思い起こしてください。『あなたがたが不信の罪を犯すなら、わたしはあなたがたを諸国民の手に散らす。あなたがたがわたしに立ち返り、わたしの命令を守り行なうなら、たとい、あなたがたのうちの散らされた者が天の果てにいても、わたしはそこから彼らを集め、わたしの名を住ませるためにわたしが選んだ場所に、彼らを連れて来る。』と。これらの者たちは、あなたの偉大な力とその力強い御手をもって、わたしが贖われたあなたのしもべ、あなたの民です。ああ、主よ。どうぞ、このしもべの祈りと、あなたのしもべたちの祈りに、耳を傾けてください。どうぞ、きょう、このしもべに幸いを見せ、この人たちの前に、あわれみを受けさせてくださいますように。』そのとき、私は王の献酌官であった。」2章17節です。「それから、私は彼らに言った。『あなたがたは、私たちの等面している困難を見ている。エルサレムは廃墟となり、その門は火で焼き払われたままである。さあ、エルサレムの城壁を建て直し、もうこれ以上そしりを受けないようにしよう。』そして、私に恵みを下さった私の神の御

手のことと、また、王が私に話したことばを彼らに告げた。そこで彼らは、『さあ、再建に取りかかろう。』と言って、この良い仕事に着手した。」神がエルサレムのことを預言において話されなかったら、誰も、彼らがしたことをするようには促されなかったでしょう。エルサレムは、ネヘミヤの指導の下で、城壁が再建された場所でした。

さて、新約聖書のヨハネ2章を開けてください。ヨハネ2章です。エルサレムについての事実、預言の七番目の事実は、エルサレムが、ヘロデが二番目の神殿を建てた場所だったことです。エルサレムは、ヘロデが二番目の神殿を建てた場所です。エルサレムを訪れば、この二番目の神殿の証拠に至る所で見ます。これは、実にわくわくさせます。みなさんがイスラエルに行かれたか、エルサレムへ行かれたかわかりませんが、それは故郷に行く気がします。多くの人は、今は行かないが、千年王国まで待つつもりだと言います。けれども、そこは何とすばらしい場所でしょうか。みなさんの中には、たった今、思いの目の中で、スコパス山(Mount Scopus)に座って、岩のドームとその壁のある、あの美しい都を見ていることでしょうか。もしかしたら、聖地ホテル(Holyland Hotel)に行って、私たちの主が地上におられた時のエルサレムの都の、巨大な、すばらしい模型を見たことがあるでしょう。ヘロデの建てた神殿だけで、どれだけの大きさがあったか思い描くことができます。多くの人が、それを古代世界の不思議と呼びます。それは、すばらしい所でした。ヨハネ2章18節です。こうあります。「そこで、ユダヤ人たちが答えて言った。『あなたがこのようなことをするからには、どんなしるしを私たちにを見せてくれるのですか。』イエスは彼らに答えて言われた。『この神殿をこわしてみなさい。わたしは、三日でそれを建てよう。』そこで、ユダヤ人たちは言った。『この神殿を建てるのに46年かかかりました。あなたはそれを、三日で建てるのですか。』しかし、イエスのご自分のからだの神殿のことを言われたのである。それで、イエスが死者の中からよみがえられたとき、弟子たちは、イエスがこのように言われたことを思い起こして、聖書とイエスが言われたことばとを信じた。」聖書は、ユダヤ人のためにヘロデ大王によって建てられた神殿があったことを、明かにしていることだけを指摘したいと思います。ところで、この建築の事業は、— よく聞いてください — 6年後に再び滅ぼされるまで完成しませんでした。確かに、その時点でヘロデは46年を費やしていましたが、まだ建築中だったのです。紀元64年まで、それは事業として完成しませんでした。この同じ年にニロがローマを焼いて、それをクリスチアンのせいにしました。6年後に、エルサレムとそこにある神殿を焼きました。エルサレムは、ヘロデが二番目の神殿を建てた場所でした。

これによってすぐに、エルサレムが、ローマによって滅ぼされた場所である事実がわかります。これに関連して、現在にまで影響している興味深い預言があります。ルカ19章を開いてください。神の預言の計画の中で、エルサレムは中心的な部分を占めつづけています。すべてのものが、この都に向けられているかのようです。ここが、ローマによって滅ぼされた場所です。この過程は、だいたい紀元66年から始まりました。この都と神殿が滅ぼされたのは、紀元70年です。さらに3年間マサダ(Masada)を包囲して、紀元73年に終了しました。ヨセフスは、ローマが、この都だけで100万人以上の人を殺したと言っています。ほぼ100万の人を捕囚としました。ルカ19章で、このことが起こる前、41節から44節までに次のことばがあります。「エルサレムが近くなったころ、都

を見られたイエスは、その都のために泣いて、言われた。『おまえも、もし、この日のうちに、平和のことを知っていたのなら、しかし今は、そのことがおまえの目から隠されている。』イスラエル人の多くの人々は世俗的であり、平和が何であるか彼らの目から隠されていることを、言っておきましょう。イエスは言われました。「『やがておまえの敵が、おまえに対して類を築き、回りを取り巻き、四方から攻め寄せ、そしておまえとその中の子どもたちを地にたたきつけ、おまえの中で、一つの石もほかの石の上に積まれたままでは残されない日が、やって来る。それはおまえが、神の訪れの日を知らないからだ。』これは、実際に起こりました。ヨセフとその時代の人たち、そしてユダヤ人のことばが、そのことをいくつか詳細に述べています。

21章を開きましょう。このことについて、イエスは、今日の私たちをも驚かせるみことばを、いくつか加えられています。ルカ21章20節から始まります。このように言われました。「エルサレムが軍隊に囲まれるのを見たら、そのときには、その滅亡が近づいたことを悟りなさい。そのときユダヤにいる人々は山へ逃げなさい。」そこにいる962人だけが、これを文字通り受け取りました。「都の中にいる人々は、そこから立ちのきなさい。いなかにいる者たちは、都に入ってははいけません。これは、書かれてあるすべてのことが成就する報復の日だからです。その日、悲惨なのは身重の女と」恐怖が母親たちに訪れたことを想像できますか。ヨセフは、赤ん坊が母親の胎から引き裂かれて、エルサレムにいる飢餓状態の人々の食べ物にしたことを記しています。イエスは言われました。「その日、悲惨なのは身重の女と乳飲み子を持つ女です。この地に大きな苦難が臨み、この民に御怒りが臨むからです。人々は、剣の刃に倒れ、捕虜となってあらゆる国に連れて行かれ、異邦人の時の終わるまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされます。」みなさん、クリスチャンが世界中で、この預言がまだ成就していないと主張し続けていることには、狼狽してしまいます。もし前千年王国説を支持しているなら、その人は、神殿の回復を待ち望んでいます。メシヤの来臨を待ち望んでいます。けれども実際のところ、この預言を信じない大部分のクリスチャンは、預言の中でのエルサレムの場所を文字通り信じていません。このような人々は、イスラエルが教会と別であることを信じていません。教会がイスラエルであり、イスラエルが教会であると信じています。これが、世界中のクリスチャンの大部分を占めています。一部ではなく、大部分です。私は、別のことを信じている人たちと交わりをもち、その中の牧師であることを、神に感謝しています。もし私たちがイスラエルとエルサレムのことを信じていないと私が感じていたとしたら、私は気兼ねなく、本当のことを話すことはできなかったでしょう。これは、とても重大な問題です。聖書は、今も成就しているのでしょうか。言い方を換えてみましょう。エルサレムは、イスラエル人の手の中にあるのでしょうか。そうです、1967年以来そうなのです。「えっ、でも異邦人の岩のドームのモスクがあるではないか。まだあるんだから、エルサレムは踏み荒らされている。」と言う人がいるでしょう。冗談を言わないでください。1967年にイスラエルの兵士たちは、その壁を飛び越えて、その土に足をつける喜びを味わいました。イスラムの世界に対して親切をして、イスラエルはイスラム大議会に、その山の聖なる場所の規制と管理を許可しました。その過程の中で、彼らはかなり好戦的になりました。イスラエルはその土地を所有しています。エルサレムは、異邦人に踏み荒らされていません。エルサレムは、ユダヤ人の手の中にあります。ところで、全世界は、イスラエルがエルサレムを

あきらめてほしいと願っています。

バチカンに関しては、昨年、初めて、全教会史でユダヤ人に行なってきたことに、いくらか責任があることを本当にわずかに示しました。私は、それを読みました。当たり障りが良く、弱々しいものです。本来あるべき文面とは違ってしています。その過程の中で、バチカンはほとんど権謀術数を用いていました。というのは、バチカンは、中東問題の本当の答えは、バチカンがイスラエルを支配することだと主張したからです。実を言いますと、私はこの記事を、「預言のファイル」と呼んでいるファイルに入れました。なぜなら、この問題をずっと考えていくべきだと思うからです。バチカンは、ほとんど毎週働きかけて、中東に和平をもたらすため、自分の勢力と権力と意思を用いていくと主張しています。黙示録11章で、恐ろしく邪悪なバビロンの都が、私たちの主が十字架につけられた場所であることがわかります(11:8参照)。みなさん、エルサレムが終りの時に、世界宗教に支配された宗教のメッカになり、実際に神がみことばの中で描かれた舞台を整えることが、ありえるのではないのでしょうか。私たちは、自分が預言について信じていることに、もうちょっと気をつけていなければならないと私は思います。私たちがこの問題について、文字通り受け取っていかねばならないことを、神が示し続けられているようです。私は、文字通り受け取ります。

エルサレムは、ローマに滅ぼされた場所であり、イエスは、「異邦人の時の終わるまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされます。」と言われました。これと、ローマ11章で使われている、「異邦人の完成のなる時まで」という言葉とごっちゃにしないでください。後者は、異邦人の救いのことを話していて、患難の終りまで続くのです。けれども、「異邦人の時の終わるまで」は、エルサレムの支配のことを言っています。これは今、イスラエルの手中にあります。米議会が大使館をテル・アビブからエルサレムに移す投票をすることは、もっと前に行なわれるべきことではありましたが、これに対し、ここ2、3か月の間に公の機会が与えられた時に感謝してきましたが、ここで再度個人的にも公にも感謝したいと思います。神が彼らを祝福されますように。大統領は、和平プロセスに影響を与えようと思っていたので、それをしたくありませんでしたが、今は賛成しています。問題は、大使館がまだ移っていないことです。イスラエルの敵の陣営が、米議会を動かさないように説得しようとしています。これは、ある意味で些細な問題ですが、別の意味では非常に大きな問題です。これは、神のみことばと、神がエルサレムを永遠のイスラエルの首都として言われていることを支持していることを取り扱っています。

9番目の事実に戻りましょう。マタイ16章を開いてください。興奮してきました。私が自制できるようにお祈りください。熱中してきました。マタイ16章21節です。イエスは弟子に言われました。神のみことばが告げています。「その時から、イエス・キリストは、ご自分がエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえらなければならないことを弟子たちに示し始められた。」もしあなたがユダヤ人なら、ここに預言的な意義を見出さずにはいられないでしょう。これによって、九番目の事実が浮き彫りになります。エルサレムは、私たちの主が十字架につけられて、葬られ、よみがえられた場所です。いけにえが祭壇にささげられるのは、エルサレムでなければなりません。何百年も、何百年も、ユダヤ人が預言的な象徴の中で贖いを思い描いたのは、ここエルサレムだったのです。罪は、血を流すささげ物によつ

て、処理されなければなりません。すべてのユダヤ人は、ヘブル10章4節の言っていることを知っています。「雄牛とやぎの血は、罪を除くことはできません。」けれども、みなさん、世の罪を取り除く方が来られたのです。バプテスマのヨハネは、「見よ。世の罪を取り除く神の小羊。(ヨハネ1:29)」と言いました。もう既に知らされていた神の小羊です(訳注: THE lamb of God としか言っていない。)。すばらしいことに、イエスは、エルサレムでのいけにえの羊が飼育されていた、ベツレヘムでお生まれになったのです。それらは、傷もなく汚れもあってはいけませんでした。ベツレヘムの羊飼いたちに、この羊が飼われていました。こうした特別の羊は、いけにえのためにエルサレムで売られました。私たちの主は、すべての犠牲の羊が生まれたところでお生まれになったのです。そして、私たちの主は、すべての犠牲の羊が死んだところで死なれました。ハレルヤ！ここは、私たちの主が十字架につけて、葬られ、よみがえられた場所です。これだけでも、この場所が信者の心にとって尊いところになるでしょう。

主が実際にどこで死なれたのか、実際の墓はどこにあるのか、議論の真っ最中ですが、エルサレムを訪れることほど、すばらしいことはありません。そこのすべての宗教は、他の場所があるみたいですが、私自身いくつかあります。ちょっと極端なので、みなさんは高く評価されないと思いますが、私は個人的に、一般の見解とは違って、この方がオリーブ山で死なれたと信じています。私は、イエスが墓で葬られたのも、オリーブ山だと信じています。それにはたくさん理由があります。単純な理由としては、オリーブ山のほかに、神殿の幕が上から下まで真二つに裂けたのを見ることが出来る場所はありません。私は、この方が、オリーブ山でオリーブの木の十字架につけられたと信じています。聖書には、「そして自分から木の上で、私たちの罪をその身に負われました。」と言っています。これは、ペテロ第一2章24節です。(訳注: 新改訳は、「十字架」となっていますが、欽定訳は“tree”となっているので言い換えました。デービットの言っている「オリーブの木の十字架」は、地面に生えているオリーブの木の上部を切り、その木に枝を交差に付けて、そこに死刑囚がつけられたことを言っているのでしょう。)でも、言い争わないようにしましょう。

使徒行伝1章を開いてください。10番目の事実です。エルサレムは、一 用意できてますか
一 教会が誕生した場所です。多くの教団が、母教会をどこかのある町にしていますが、正しい教えは、母教会はエルサレムです。私たちは、そこから出ているのです。私たちは、もはやそれは大事ではないかのように、教会史の中でそのことを忘れてしまっています。それが、ユダヤ人が指導していた、ユダヤ人の聖書の、ユダヤ人のメシアの、ユダヤ人の儀式の、エルサレムにあったユダヤ人の教会であったことを忘れてしまいます。これは、エルサレムから始まったのです。使徒行伝1章4節です。私たちの主イエスは、弟子たちにエルサレムにとどまるように言われました。注意して見てください。4節です。「彼らと一緒にいるとき、イエスは彼らにこう命じられた。『エルサレムを離れないで、わたしが聞いた父の約束を待ちなさい。』」これは、エルサレムです。8節です。「聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、および地の果てにまで、」2章14節を見てください。「ペテロは11人とともに立って、声を張り上げ、」これは、教会の一番初めてのメッセージです。「人々にはっきりと言った。『ユダヤの人々、ならびにエルサレムに住むすべての人々』」ならびにどこに住む人々ですか。エ

エルサレムですね。「『あなたがたにしていだきたいことがあります。どうか、私のことばに耳を貸してください。』」5章28節です。すべてを見ることはできませんが、あと一つだけにします。5章28節です。「彼らが…使徒たちに…言った。『あの名によって教えるはならないときびしく命じておいたのに、何ということだ。エルサレムの中にあなたがたの教をを広めてしまい、』ヨセフスは、神殿が滅びるまでに、教会が10万人以上に増えたと言っています。これは、非常に大きな教会と呼ばれます。

エルサレムは、イエス・キリストの教会が誕生した場所です。使徒行伝が、クリスチャンがユダヤ教の一派であると言っていることを、思い出してください。これは、教会に簡単に忘れ去られてしまう事実です。ユダヤ教の宗派には、パリサイ派、サドカイ派、エッセネ派、ヘロデ党も含まれます。聖書は、はっきりと全く同じ言葉を用いて、彼らがナザレ派であると言っています。(訳注:使徒24:5 参照。新改訳は、「ナザレ人という一派」となっていますが、原語または英語でも、ナザレ人でもナザレ派でも、全く同じ言葉が使われています。)これが、みなさん、教会の始まりなのです。これは、ユダヤ教でした。使徒行伝15章でこの教会は、異邦人がこの中に入るべきなのか、議会が必要となりました。でも、これもまた、聖書の預言の一部でした(15:16-18参照)。ですから、彼らは当然、神の言われたことに同意し、異邦人もこの交わりに入ってきてても良いようになったのです。何と驚くべきご計画を神は持っておられるのでしょうか。

11番目の事実です。イザヤ3章をお開きください。イザヤ3章です。エルサレムが、アブラハムが祝福を受けた場所であることを話しました。また、ダビデ王がエブス人から攻め取り、神殿が建てられ、バビロンによって滅ぼされた場所です。ペルシャ人クロスが、主のために宮を建てることを望んだ場所です。彼はイランから来た者です。ネヘミヤの指導の下で城壁が再建され、ヘロデが二番目の神殿を建てて、ローマに滅ぼされた場所です。そこは、私たちの主が十字架につけて、葬られ、よみがえられた場所であり、教会が誕生した場所です。けれども、みなさん、エルサレムは、ユダヤ人が捕囚から帰還してくる場所です。彼らはエルサレムに戻ってきます。イザヤ3章18節です。「それゆえ主は」17節です。「シオンの娘たちの頭の頂をかさぶただらけにし、主はその額をむき出しにされる。その日、主はもろもろの飾り、」主が彼らをさばかれることを、聖書は言っています。主が、大きなさばきを下し、彼らを捕らえ移されます。

けれども、神は、これに対してすばらしい方法で答えてくださり、たとえさばかれても、彼らをご自分の地に戻して下さいます。詩篇147篇2節を見ましょう。詩篇147篇です。神は、さばきのことを語られた後に、イザヤはずっとこのことを話していますが、しかしながら、さばきのことを絶えず言及している中で、イザヤもエレミヤも、神が彼らをエルサレムに連れて来られることを話しています。詩篇147篇2節には、こう書かれています。「主はエルサレムを建て、イスラエルの追い散らされた者を集める。」彼らは、エルサレムに来るのです。神は、みことばを成就されます。詩篇126篇に戻ってみましょう。詩篇126篇です。これは、美しいです。詩篇126篇です。1節から6節までです。「主がシオンの捕らわれ人を帰されたとき、私たちは夢を見ている者のようであった。そのとき、私たちの口は笑いで満たされ、私たちの舌は喜びの叫びで満たされた。そのとき、国々の間で、人々は言った。『主は彼らのために大いなることをなされた。』主は私たちに大いなることをなされ、

私たちは喜んだ。主よ。ネゲブの流れのように、私たちの捕らわれ人を帰らせてください。涙とともに種を蒔く人は、喜び叫びながら刈り取ろう。種入れをかかえ、泣きながら出て行く者は、束をかかえ、喜び叫びながら帰って来る。」イスラエルの民がその地に帰ってきて、1946年から48年に征服した映画を私は喜びをもって見ましたし、ここにいる人の間でも、それを見る光栄にあづかった方が多いでしょう。白黒のニュース映画の中で、何千人ものユダヤ人が、海から飛び込んで、水の中で互いに足を踏み鳴らして、群れをなしてぞろぞろと舟から出て来るのを見ることができます。男も女も子どもも、陸地に走っていき、顔を伏せて、その土に口づけをし、激しく泣くのを見ます。このすばらしい光景の中で、多くの指導者が民に、「涙とともに種を蒔く人は、喜び叫びながら刈り取ろう。種入れをかかえ、泣きながら出て行く者は、束をかかえ、喜び叫びながら帰って来る。」と言いました。神は、ご自分の民をその地に連れて来られました。自分たちの土地で、もう一度自分たちの国ができることが本当に可能になるのだと思って、彼らは喜びで激しく泣きました。けれども、ずっと前にエゼキエル37章14節で、干からびた骨の幻の中で、彼らが生き返り、神がイスラエルの地に彼らを連れて来られる、と書かれています。「主はエルサレムを建て、イスラエルの追い散らされた者を集める」のです！ハレルヤ！主を賛美します。主は、これをなされて、今でも行なわれています。主が実に多くの人を連れて来られているので、イスラエルが彼らをどうやって養っていくのか考えるのが不可能になっています。私たちのちょうど目の前で、何とすばらしい事が起こっているのでしょうか。預言は成就しているのか、とお聞きになりますか。もし主の来臨に用意ができていなければ、私はバックパックを持って、私たちは故郷に帰りますよ。

12番目の事実です。ゼカリヤ12章を開いてください。ゼカリヤ12章です。エルサレムは、残念ですが、すべての国々が、ハルマゲドンと呼ばれる戦いで集まる場所です。そうです、これはやってきます。現在のイスラエルの政情について、みなさんが多くの早まった判断をしすぎないように、警告をしたいと思います。新政権が発足したので、全力でイスラエルを傷つけて、イスラエルに対抗するために結束する努力が、今しばらくの間阻まれるのではないかと考えている人が多いです。このことについて警告したいのです。こうした記事を多く読みましたが、こうした理由で私はそれにじっくり感じていません。こうした見方に反して、私が今起こっていることに賛成していることに注意していただきたいですが、こうした見方に反して、これは、まさに預言のことばの中にあるシナリオを見せているように私には思えます。つまり、西側連合諸国の指導者が、実際にダニエルが9章で言っている70週のすばらしい預言にあるように、「彼は契約を結ぶ」のです(9:27参照)。ヘブル語のここの「結ぶ」の意味は、「強いる(enforce、または実施する)」です。世界各国は、国際的なグローバルな共同体によって、実際はイスラエルに和平を「強い」ます。私は、このことをいかぶっています。イスラエルの指導者が、偽りの和平プロセスに追従していたのを見てきましたが、しかし今は、それが少し変わってきました。今こそ、聖書が語っているシナリオがあるのではないかと思うのです。すなわち、わずかのイスラエル人が、神に感謝すべきことに、この和平プロセスの危険性を見取るのですが、けれどもこれまで起こってきたように、世界各国がイスラエルに和平合意を強いるのです。これが、反キリストと患難を引き起こします。

ゼカリヤ12章には、こう書いてあります。2節です。「見よ。わたしはエルサレムを、その回りの

すべての国々の民をよろめかす杯とする。ユダについてもそうなる。エルサレムの包囲されるときに。その日、わたしはエルサレムを、すべての国々の民にとって重い石とする。すべてそれがかつぐ者は、ひどく傷をつける。地のすべての国々は、それに向かって集まって来よう。」これは、面白いですね。8節です。「その日、主は、エルサレムの住民をかばわれる。その日、彼らのうちのよろめき倒れた者もダビデのようになり、ダビデの家は神のようになり、彼らの先頭に立つ主の使いのようになる。」主を賛美します。10節です。「わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと哀願の霊を注ぐ。彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見、ひとり子を失って激しく泣くように、その者のために嘆き、初子を失って激しく泣くように、その者のために激しく泣く。」みなさん、イスラエルが1967年にエルサレムを取った時までは、主が来られたとしても、不信者つまりイスラエル人がエルサレムの住民であることはできません。つまり、イスラエルは不信仰だから預言の成就ではない、と言う人は、聖書を読んだのかと思ってしまいます。主が来られて御霊を注がれ、彼らが主に立ち返り、自分たちが突き刺した者を仰ぎ見るためには、彼らはエルサレムの住民でなければならないのです。そうなのです、今起こっていることは、預言の成就なのです。エルサレムが、すべての国々が、ハルマゲドンの戦いで集まる場所なのです。

14章2節には、こう書いてあります、「わたしは、すべての国々を集めて、エルサレムを攻めさせる。」問題は、エルサレムなのです。常にそうでした。今、神はエルサレム・ポストのメディア空間を、全世界がエルサレムに関して圧力を加えている事でいっぱいになっています。「町は取られ、家々は略奪され、婦女は犯される。町の半分は補囚となって行く。しかし、残りの民は町から立ち滅ぼされない。」でも、3節を見てください。「主が来られる。」ちょうど、イスラエルが地図上から消し去られようとしている時にです。「主が来られる。決戦の日に戦うように、それらの国々と戦われる。その日、主の足は、エルサレムの東に面するオリーブ山に立つ。」等等です。ハレルヤ！早く起こってくれないかなと思います。詩篇50篇を開いてください。急いでこの点について言及します。詩篇50篇です。「神の神、主は語り、地を呼び寄せられた。日の上るところからその沈むところまで。麗しさの極み、シオンから、神は光を放たれた。われらの神は来て、黙ってはおられない。御前には食い尽くす火があり、その回りには激しいあらしがある。神がご自分の民をさばくため、上なる天と、地とを呼び寄せられる。」そうです、主は来て、ご自分の民をさばかれます。そうです、主は来て、イスラエルに反対した世界のすべての国々をさばかれます。イザヤ52章9節と10節には、驚くべきことが書かれています。「エルサレムの廃墟よ。」そうです、非常に厳しくさばかれます。「共に大声をあげて喜び歌え。主がその民を慰め、エルサレムを贖われたから。主はすべての国々の目の前に、聖なる御腕を現した。地の果て果てもみな、私たちの神の救いを見る。」今、私たちのために整えてくださいます。

急いで3番目の事実を見ます(訳注:13番目のことでしょう)。エルサレムは、いつかすべての国々の民が礼拝に行く場所です。「僕は、聖地ツアーで行きたくない。そこに行くんだから。」そうです、もし信者でしたら、実際礼拝のためにエルサレムに行くのです。でも、このエルサレムは変化しています。メシヤによって、地勢が極端に変化します。この都は、何とすばらしい姿になるのでしょうか。全地は喜び、状況は美しいものになります。私たちの偉大な神であり王である方の都です。

私たちは、そこに行って礼拝をします。ゼカリヤ14章がそう言っています。ゼカリヤ14章です。16節と17節に次の預言があります。「エルサレムに攻めて来たすべての民のうち、生き残ったものはみな、毎年、万軍の主である王を礼拝し、仮庵の祭りを祝うために上って来る。地上の諸部族のうち、万軍の主である王に礼拝しに来ない氏族の上には、雨が降らない。」雨が降らないのです。もっとあります。イザヤ2章です。これは、何とすばらしい預言でしょうか。メシヤ王国では、主のみおしえが、はなばなしく出てきます。イザヤ2章2節と3節です。「終りの日に、主の家の山は、山々の頂に堅く立ち、丘々よりもそびえ立ち、すべての国々がそこに流れて来る。多くの民が来て言う。『さあ、主の山、ヤコブの神の家に上ろう。主はご自分の道を、私たちに教えてください。私たちはその小道を歩もう。』それは、シオンからみおしえが出、エルサレムから主のことばが出るからだ。」エレミヤ、イザヤ、ゼカリヤ、ミカなど、数多くの預言者がこのことを語りました。詩篇68篇29節では、「エルサレムにあるあなたの宮のために、王たちは、あなたに贈り物を持って来ましょう。」とあります。詩篇102篇21節では、「人々が、主の名をシオンで語り、エルサレムで主を賛美するために。」とあります。詩篇135篇21節は、「ほむべきかな。主。シオンにて。エルサレムに住む方。ハレルヤ。」そうです！エルサレムが、将来すべての国々の民が礼拝のために行く場所です。

14番目の事実です。みなさんの中に、聖書を閉じてチャックを締めた人がいますね。(笑)あと2、3分で終わります。エルサレムは、－ 注意して聞いてください － すべての信者が死んだときに集まる場所です。ヘブル12章を開いてください。いえ、私は気が狂っていません。エルサレムは、すべての信者が死んだときに集まる場所です。ヘブル12章22節からです。「しかし、あなたがたは、シオンの山、生ける神の都、天にあるエルサレム、無数の御使いたちの大祝会に近づいているのです。また、天に登録されている長子たちの教会、万民の審判者である神、全うされた義人たちの霊、」これは、おそらく旧約時代の聖徒でしょう。私は次が好きです。「さらに、新しい契約の仲介者イエス、それに、アベルの血よりもすぐれたことを語る注ぎかけの血に近づいています。」あなたは死ぬときに、シオンの山、天にあるエルサレム、生ける神の都に来ます。もっと状況はよくなります。

黙示録21章を開いてください。15番目の事実です。これが最後です。エルサレムは、贖われた者が永遠に住む場所です。このことは、詩篇137篇が言っているように、神が私たちに、決してエルサレムを忘れないようにしてくださることを教えてください。決して忘れることはありません。エルサレムが、全地の最上の喜びになります。黙示録21章の2節で、次のようにあります。「私(ヨハネ)はまた、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとを出て、天から下ってくるのを見た。そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。『見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの涙をすっかりぬぐい取ってください。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。』10節です。「そして、御使いは御霊によって私を大きな高い山に連れて行って、聖なる都エルサレムが神のみもとを出て、天から下ってくるのを見せた。」

みなさん、贖われた者が住む、このすばらしい永遠の都は、聖書の至る所にあります。詩篇46篇4節では、こうあります。「川がある。その流れは、いと高き方の聖なる住まい、神の都を喜ばせる。神はそのまなかにおまし、その都はゆるがない。神は夜明け前に□これを助けられる。」詩篇48篇1、2節は、次の通りです。「主は大なる方。大いにほめたたえられるべき方。その聖なる山、われらの神の都において。高嶺の麗しさは、全地の喜び。」このため私は、新しい都が地上に位置すると信じているのです。「北の端なるシオンの山は大王の都。神は、その宮殿で、ご自分をやぐらとして示された。」詩篇87篇に、次のすばらしいことばが書かれています。「主は聖なる山に基を置かれる。主は、ヤコブのすべての住まいにまさって、シオンのもろもろの住まいを愛される。神の都よ。あなたについては、すばらしいことが語られている。」99篇です。「主は王である。国々の民は恐れおののけ。主は、ケルビムの上の御座に着いておられる。地よ、震えよ。主はシオンにおいて、大なる方。主はすべての国々の民の上に高くいます。国々の民よ。大なる、おそれおおい御名をほめたたえよ。主は聖である。」9節です。「われらの神、主をあがめよ。その聖なる山に向かって、ひれ伏せ。われらの神、主は聖である。」詩篇132篇13節はこう言っています。「主はシオンを選び、それをご自分の住みかとして望まれた。」詩篇135篇21節です。「ほむべきな。主。シオンにて。エルサレムに住む方。ハレルヤ。」神の民は、言いなさい。(会衆)「アーメン！」いいえ、違います、「ハレルヤ」です。(笑)(訳注:申命 15:15-26 にある言い回しをデイビッドは説教中によく使うため、会衆は釣られて「アーメン」と言ってしまったわけです。)

エルサレムを訪れると、心に悲しみを持たざる得なくなります。ずっと前にイエスが見られたこの都とその状態は、今を表しているようです。イエスは、その都のために泣かれました(ルカ19:41)。「ああ、エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、…わたしは、めんどりがひなを翼の下に集めるように、あなたの子らを幾たび集めようとしたか。それなのに、あなたがたはそれを好まなかった。(マタイ 23:37)」ここには、悲しみがあります。けれども、喜びもあります。私は、きらめくこの古い都を見て、「いつの日か、どのよう姿をしていたか思い出せないようになるだろう。」と言います。神が、世界が見たこともない最も美しい都を、天から直接もたらされるからです。死んで主のみもとに行った人たちは、もう既にそれに触れています。神はそれをもたらし、地上に置かれます。そして、私たちはその都に、とこしえからとこしえまで住むのです。人間が言い尽くすことのできない都です。私たちは、親しみを持ってこれを天国と呼ぶのです。あなたが私たちとともにいるのか、私は考えます。あなたはどうか？ お祈りしましょう。